

## 二十一、自障、自蔽

「夫れ自障は愛に若くは莫し。自蔽は疑に若くは莫し。但疑愛の二心をして了に障碍なからしむれば、即ち浄土の一門未だ始めより間隔せず、弥陀の洪願常に自ら撰持したまふ。必然の理なり。」(信巻引用 『樂邦文類』後序)

人、真実の一道を求むるに最も恐るべきは、心臓の混濁である。

心臓の濁れは、身口意の三業の上に現われて、その生活をして濁悪なるものたらしめるからである。

心臓の濁れとは何であるか。

心中深く「我」が食い入って、全我を支配して、自覚せしめず、如来を信ぜしめず、念仏申しめないことである。しこうして『樂邦文類』の「愛」と「疑」とは、我の持つ二つの相である。心臓の濁れそのものである。

「それ自障は愛に若くはなし。」

愛こそは、自らの道を障碍する唯一の原因である。愛とは、貪愛である。貪愛の心が生きてゆく道を障えるのである。

愛は我である。我は必ず愛である。

愛こそは、混濁せる心臓のすべてである。

愛は、まことに六道輪廻のわれの最大唯一の味方である。親切なる味方である。しかしこの親切なる味方こそ、もつとも恐るべき我の変化にすぎない。やがてこの恐るべき詐親者は、己を三塗へとつれてゆく。

愛がもし親切なる味方でないならば、自障にはならない。しかしそれが我の変化であり、詐り親しむ悪魔でないならば、自障にはならない。この味方にして悪魔であるところに愛の正体がある。しかし凡夫が凡夫のままにいるかぎりその正体はつかめない。

我は魂の奥深く巢食うて、その正体を見せないとともに、ものの真相を知らせない。ものみなをその時々感情の色に染めてしか見せない。しかもいかにも、善悪好悪など一切が正しく明瞭に見えるかのごとく誤信せしめる。かくて一切の心臓はみな、狂っている濁っている。

一人の間人を、冷たいと言ひ、温かいと言ひ、悪人と言ひ、善人と言ひ。よくよく見れば、愛の満足を与えたものが善人で、欲に逆らうものが悪人であり、冷たい人である。

石川五右衛門が五円の金をくれるのと、親鸞聖人より一句の法門やお叱りを受けるのとでは、五右衛門の五円に喜ぶ心である。

我は己の幸福的立場のみを守り続けようとする。

如来の本願は、弘誓願と言われる。弘とは、一切群生海をつくす普遍廣大を意味する。「ひろい」ことである。一切衆生の福樂のみが、如来一人の福樂であり、一切衆生の苦が如来一人の苦である。

信心とは、この如来の弘誓のお慈悲に通ずる心である。この一切衆生に対する大慈悲のみが、唯一の正しい心臓であることがわかる心である。

この心臓からの叫びを聞いて、この唯一の真実なる心臓からの血潮にふれて、はじめて私の恐るべき正体が知れはじめ。

「我」は自分の居所をわからしめない。

我の一番重んずるものは己の「立場」である。

その立場を守りつづけるためにのみ、懸命の労作をする。高く出るのも、低く出るのも、丁寧にするのも、ぞんざいにするのも、へつらうのも、怒るのも、逃げるのも、弁解するのも、追従するのも、我がいろいろに相を変えて、ただ立場一つを守りつづけようとするのにほかならない。

お大家に生まれる。子どもの時から一段上の人間のように「坊ちゃん」とよばれる。女中や下男や周囲の人から奉られると、いつの程にか、それが当然のようになる。我は根強い城を造って、立場を造っている。しかしそこに何の根底があり、特権があるのだろうか。

そうしたことは、おしてもって一切の場合に考えることができる。

2

長いこと病気をする。それが重態になる。周囲の人が、人間的好意から、やれ医者だ、薬だ、看護だと、非常時状態を出現して奉仕する。それに慣れると、やがてご本人は、人間はだれもかれも彼に奉仕してその指揮命令に従属するのが当然であり、それが己の特権であるかのごとく思いはじめて、その無意識界には、とても根強い立場を造る。

だが、権利や圧制によつて、彼に奉仕しなくてはならぬ義務を背負った者は一人もいない。

彼はまだ、他人の病中に一度の使いすらしたことがなくても、彼が病で動けない日、その周囲が奉仕するのは、人間の尊い同情の賜である。彼もまたその健康なる日、人一倍他のために奉仕するであろうことを信ぜられるがゆえであり、自らを奉仕的立場におくことを尊ぶ人間性によるのである。しかるにもし、彼が尊き衆生恩を無視して、この尊き奉仕を英雄主義的満足によつて強い、さらに多くの人が彼のために動くことを彼の人徳と誤信し、安価なる優越心の犠牲となし、我慢を増長するならば、彼はすでに人間ではなくて悪魔である。

みな粗末なものを食べている時、自分だけが、それよりも上等なものを一人食べるのには、よほどの心臓の濁りがある。愛が必要であり、我慢が必要である。

私は本部において、時に私だけに出されたものを食べていたこともあったが、気持ちのよいものではなかった。たとい、少し取っておすそわけをしても。私には、もうとてもそんなことはできなくなった。私の心臓の濁りがいよいよはつきり見えるがゆえに。それでも「先生のお体はお大事なのですから。」それは、ソロバン上のことであつて道ではない。私の体が大切ならば、他の人の体も大切である。たといそのために命が短いというようなことが万が一にあつたとしても何であろう。道は、寿命の長さに比例はしない。

僧伽の六和の中に「利和同均」というのがある。和を成就するためには、供養の利を均しくすることである。食や衣や住の平等ももちろん入っている。この点でも、私にはまだ相済まぬことがたくさんある。もし、たたき落とすようにしてでも、どなり散らしてでも、食わねば承知のできぬ者がいれば、彼は食餓鬼である。悪党である。そうした彼の立場は、だれもかれも奉つたのではない。彼が貪欲ゆえに築いた彼を焼く地獄の釜にすぎない。

私一人が生きているために、多くの人にご厄介をかける。しかしそれはすべてあいすまぬことであり、ありがたいことである。だれ一人として、私のために奉仕すべき義務を背負つて生まれてきた人はない。ただあいすまぬことであつて、当然なことではない。人は、自分の子どもや、妻など目下の者は、座つていて顎で使つてもいいように思っている。そしてそれに慣れると、それが当然のように思われてきて、もしその立場がものを言わぬ場合は瞋恚の炎を燃やしつつ圧制を働く。

3

子どもが、お金を儲けて渡さぬとて怒つて勘当すると言つた親がある。その親が大酒飲みであつたりする時、子どもは悲惨である。世には、子どもを売つて飲んでいく親さえある。親が貧困しているのを見て、娘が人間の幸福をふり棄てて親のために奉仕しているのは尊いことではある。しかしわが子すら、自分のために犠牲にすべきではないことを知る親であつてのみ、子は心からうれしく親に奉仕するであろう。

医学博士であるわが子に、嫁を貰つてやるのに、持参金がたんまりあると思つて、ある富豪から貰つたが、持参金がないのを知るや、どうにかしてその嫁を去らうとした親がある。しかし博士夫婦は、すでに固く結ばれてあつた。息子が嫁を去らないのを知るや、ついに息子までが敵に見えて、月々二百円の博士費を出せと親は迫つた。父子の間が複雑にもつれたのを見るや、新妻は毒薬自殺をしてしまった。博士もそれを知るやピストルで自殺して妻のあとを追うた。新聞にあつたありふれた事件ではあるが、息子の遺書には「もし世に鬼という者がいれば父だ。」と言っている。父にも言い分はあろう。だが、博士と奥さんとの間も愛であり、博士と父親の間も愛であり、父親と嫁の間もまた愛である。愛は立場を造る。そうして一步も譲らぬ時、愛は恐るべき自障となる。そしてその愛とともにあるものは疑である。

親子、兄弟、夫婦など肉親の間柄が、それが悪くなつた場合は、赤の他人よりもつと深刻である。言うまでもなく、肉親をつなぐものは愛だからである。愛は必ず憎しみをはらむ。善導大師が、「水火二河」と言うゆえんである。

愛は必ず疑う。愛は必ず憎む。愛は好きはしてもけつして信じはしない。

人と人との交渉が愛でなされるかぎり、けつして永遠性はない。いつの日にか、必ずお別れあるべく候。ゆえに、別れねばならなくなつた時、その両方か、あるいは片方が、必ず愛にのみものを言わせていたのである。

であるから、親子でも、夫婦でも、愛だけではけつして、本当の親子でも夫婦でもあり得ない。ゆえに、真に考える人は必ず、愛憎以上の世界を求める。

信の世界がそれである。信は如来の大慈悲を根底とする。

われとわが手で眼隠しをした相が疑いである。ゆえに疑いを自蔽と言われるのである。あるいはまた疑蓋と言われるのである。疑いは心の蔽いであり、フタである。

自らをいきつまらすのは愛であり、自らの道を蔽うのは疑いである。愛を超え、疑いを粉碎される時、そこに必ず一道が光ってくる。

如来の智慧光は、疑いを除き、如来の大慈悲は愛を愛と知らしめて、愛憎を超えしめる。

御正忌にあたつて、また新しく親鸞聖人に触れさせていただく。何という心臓の濁れのとれたお方であろう。喜びたもうと言えば、真実教に遭われたことばかり、悲しみ遊ばしたと言えば、機の現実相、内観の事実においてばかりである。あの大いなる力ありつつ、地下へ地下へと埋もれたもうた尊さを見よ。

女は愛によつて動き、男は名利によつて動く。聖人常に宣く、

「我は賀古の教信沙弥の定なり。」と。

どこに立場を骨頂なされしぞ。名利を求めたまひしぞ。その心臓のうちに、ひたひたと波打つ本仏弥陀の赤き血潮よ。

われ、聖人を思うて眠られず、午前二時、念仏のうちにこれを書きつつあり。

ああ。如来久遠の大悲は「設ひ我仏を得たらんに十方衆生」と願じたまい、親心に帰れとて「至心に信樂して、我が国に生れよ。」と命じ、「若不生者、不取正覚」と誓いたもう。

しこうしてかかる大悲は、わが心臓の濁りつくせるを知らしめたもう。

「仏には所依なく、所有なく、所住なし。」

何一つとして持ちたまわず、住したまわず「空無願の法に住し」たもう。

なんすれぞ、衆生の立場を作つて我を通さんとする迷妄の深き。

如来久遠の真実は、私の立場を根底より覆したもう。「上り上りて落ち場を知らぬ」凡夫なれども、百尺竿頭の一步を踏みきる時、地獄一定の全体は、大悲のみ光の中にあり。その時、なんすれぞ、足の軽き、身の軽き。

利、衰、毀、誉、称、譏、苦、楽、八風吹きすさべども、それよりも、強き如来の勅命聞こゆ。

愛の自障よりも、如来の大悲は強く、疑の自蔽よりも、智慧光は鋭い。

念仏の一道、水火二河の間に顕現して、無碍の大道を廻向したもう。貪愛瞋憎の雲霧はあれども、その下明らかにして闇なく、夫婦愛欲の中にあれども、たがいに合掌念仏するの道がある。

ああ。この弘誓広大の大慈悲に生かされて、人間特殊の關係の相が見える。愛の世界は、慈悲の世界によつて純化せられる。聖人の宗教がそこにあつた。